資料文献コーナー

「教室内カースト」

（鈴木翔著　光文社新書 2012.12.2 初版）

筆者の鈴木は群大教育学部を経て東大教育学部博士課程で教育社会学を専攻する若き学徒である。教室内カーストとは、主に中学・高校のクラス内で発生する「地位の差(ヒエラルキー)」のことで、小学校の頃からその萌芽が見られるという。本書は中高生の交友関係の研究をおこなっている鈴木がこれまでのいじめ研究を踏まえ、教室内カーストを初めて学術的に取り扱った修士論文に加筆修正を加えた初の著書だ。

本書は神奈川県の中学２年生を対象とする大規模アンケート、首都圏の１０名の大学１年生を対象としたインタビュー調査、筆者知り合いの４名の現役教師を対象としたインタビュー調査を細かく分析し、「スクールカースト」を消極的に受けざるを得ない生徒の苦悩、その存在を認めつつ、むしろそれを積極的に利用し、うまくクラス運営に利用しようとする教師側の思惑を生の声として私たちに伝えてくれる。

本書は以下の６章から構成されている。

第１章「スクールカースト」とは何か？

（１）マンガ・小説の世界に見る「ランク」付け

（２）メディアで語られはじめた「カースト制」

（３）「スクールカースト」の何が問題なのか？

第２章　なぜ今、「スクールカースト」なのか？

（１）「いじめ」と「スクールカースト」の間

（２）学校という空間―なぜ、学校に行くのか？

第３章「スクールカースト」の世界

（１）小学校時代の「スクールカースト」

（２）中学校・高校時代の「スクールカースト」

（３）カーストはどのように把握されていくのか？

（４）「上位」の風景

（５）「下位」の風景

（６）カースト間の能力と「権利」と「義務」

第４章「スクールカースト」の戦略

（１）上位グループの生徒の特徴

（２）下位グループの生徒の特徴

（３）なぜ、力関係を受け入れるのか？

（４）なぜ、地位は「固定」するのか？

（５）生徒から見た教師の態度

第５章教師にとっての「スクールカースト」

（１）教師に「スクールカースト」はどう見えるか？

（２）教師の、上位、下位の生徒に対する見解

（３）教師は「スクールカースト」そのものをどう見ているのか

第６章まとめと、これからのこと

（１）まとめ―「権力」と「能力」の構造

（２）僕からできる、（今現在）のアドバイス

（３）今後の課題

生徒間の「地位」や「序列」の表れ方が本書の第３章～第４章で細かく描きだされている。

小学校では個人単位だったものが中学校・高校ではグループ単位になり、教室内では、グループ間が接点を持ち、「上位」のグループが「下位」のグループを支配する。その力関係は、クラス全体で取り組まなければならない行事活動などの中ではっきり表れる。「上位」のグループが何かの理由で場から抜ければ、より下位のグループが教室内の支配権を握るようになる。

「上位」グループは強気な言動や派手な容姿・身なり、運動部への所属を特徴とし、「下位」グループは特徴を持たない場合が多い。「下位」グループは「上位」グループを尊敬しているわけでなく、消極的に上下関係を受け入れている。それぞれの地位にはそれに応じた「権利」があり、「行使できる」ものだけでなく、教師の言葉に突っ込みを入れる義務も伴う。教師も「上位」グループにおもねり、生徒間の上下関係を利用し、教室内の秩序を維持しようとしているとの指摘は衝撃的である。（文責：針谷正紀）